



中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

平成29年2月14日発行 通算第73号

函館・道南大会を終えて

全日音研函館・道南大会 北海道音楽教育連盟会長

梶田 邦昭 (札幌市立新琴似北中学校長)



晩秋というより初冬の北海道、函館の地で初めて行われました函館・道南大会に、全国から900名を越える皆様にお集まりいただきましたことに、厚くお礼申し上げます。函館・道南という広い地域で大会を行うにはひとかたならぬご苦労があったと思いますが、毎年行われている函館・道南大会の44回という今までの積み重ねがあったからこそ、今回の大会が開催できたのだと改めて感じました。函館・道南の先生方が大会実行委員長、金谷美也子校長先生、大会事務局長の笠島美教教頭先生を中心にまとまり、それぞれの地域を大切に音楽教育の活動が大会主題「ひびきあい つながる・ひろがる 音楽のメッセージ」をもとに道南の子ども達が音楽との関わりを豊かに体現していました。研究の方向性や公開授業についても統一感を持って行われました。多くのご助言やご示唆、そして全体講評までしていただいた国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 文部科学省 初等中等教育局 教科調査官 津田正之様、臼井学様には大変お世話になりました。また、ご助言をいただいた先生方、大会に参加して下さった方々からも多くのご示唆と励ましのお言葉をいただきましたことに感謝いたします。

亀田中学校での朝の音楽集会、冷たく凛とした空気の中、学年集会、全校合唱での気持ちのこもった真剣な合唱に、日頃の音楽教育活動が学校文化に深く根ざしていることを感じました。午後の記念演奏Ⅰ中学生オペラ「アイダ」は圧巻でした。中学生の持つ可能性を思う存分引き出し音楽の神髄に迫ろうとする函館の中学生オペラのすばらしさ、生徒達のがんばりに心の底から感動いたしました。2日目の研究演奏Ⅱでは、函館・道南の地域と共に歩んで来た音楽を堪能させていただきました。記念演奏ⅠⅡでは市民会館いっぱいに鳴り響き、そして、鳴り止まぬ拍手が何よりの証しだったと思います。

沖縄大会に向けて

全日音研沖縄大会実行委員長 我那覇 隆三 (沖縄市立美里中学校長)



ガレッジセールの二人が出演する「沖縄を変えた男」が全国で上映されました。1972年に沖縄は本土復帰を果たし、米軍統治時代に失ったものを取り戻すかのようにがむしゃらに生きた時代がありました。沖縄の高校野球が全国で勝ち進むまでに育つ過程は、復帰後の混沌とした時代を彷彿とさせます。私が中学2年時にドルが円に代わり、その後、道路が左側通行に変わりました。多感な青春時代は将に時代の変遷の最中にありました。あれから時は流れ、沖縄ポップスが全国ネットのラジオから普通に流れる時代になり、このような変遷を知る由もない今の沖縄の子供たちが伸び伸びと生きる姿に感慨深いものを感じます。

さて、次年度は沖縄県初の全国大会沖縄大会となりました。大会主題を「つなげよう未来へ 伝え合う音楽・ちむぐくる」とし、次世代を担う子供たちに夢と希望を持たせ、伝統文化とアイデンティティーの形成、音楽を媒介としたコミュニケーション力の育成、主体的・協働的学習活動の充実等を目指します。また、「ちむぐくる」は沖縄の言葉で一般的に「真心」「優しい心」という意味で使われていますが、本主題では音楽活動をする上で、人と人が関わり合う際の関係性の在り方を指しています。

大会1日目は那覇市に隣接する浦添市「浦添市でだこホール」を中心に授業を公開します。中学校では領域ごとに4つの授業を行います。器楽と鑑賞の分野で琉球音楽を扱った題材を予定しています。2日目は沖縄コンベンションセンターにて全日程を行います。研究演奏では小・中・高・特別支援を沖縄音楽で繋ぎ、特に高校は南風原高校の郷土芸能コースの生徒が加わります。記念講演は沖縄出身の盲目のテノール歌手、新垣勉氏をお招きいたします。

南国沖縄の潮風は皆様方を温かくお迎えし、琉球音楽とちむぐくるでおもてなしいたします。日々音楽教育において活躍されております先生方には是非お越しいたさき、ご助言を頂ければ幸いです。皆様方のお越しを心からお待ちしております。

Contents

- P 1 函館・道南大会を終えて 梶田 邦昭 / 沖縄大会に向けて 我那覇 隆三
- P 2~3 函館・道南大会講評
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 臼井 学 氏
- P 3 中学校部会総会
- P 4~5 函館・道南大会《中学校部会》 公開授業レポート
- P 5~6 函館・道南大会 記念演奏ⅠⅡ ・Information

発 行

全日本音楽教育研究会 中学校部会
東京都杉並区堀ノ内 1-3-1
杉並区立泉南中学校内
会長 風見 章

◆ 講評 ◆

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 臼井 学 氏
日時：平成28年11月2日（水） 10：05～
場所：函館市民会館 大ホール



私は本大会に向けて、昨年度8月の研修会、11月のプレ大会、今年の9月の授業研究会に参加させていただきました。参加させていただく度に、研究内容が深まり、また先生方の意欲が高まっていることを感じておりました。このような大会を開催することは、通常の仕事でも十分忙しい先生方にとって、時間的にも精神的にも負担になる面はあるかと思いますが、この大会をきっかけとして授業改善を図り、子どもたちにとってより意義のある授業を展開していきたいという先生方の思いが、本大会までの取組を支えていたのではないかと考えております。

昨今アクティブラーニングという言葉をよく耳にしますが、中教審等の議論の中では、子どもがアクティブに学べるような授業を展開するためには、教師自身がアクティブラーナーであることが大切であると言われております。まさに本大会に向けての先生方の姿は、教師自身がよりよい授業を目指したアクティブラーナーであったと言えるものと考えております。

中学校では、「喜びを実感できる音楽表現や鑑賞の深まりを目指して」の主題の下、実践的な研究を重ねてこられました。大会冊子には、主題に迫る3つの視点が示されています。この中から、「生徒が学びの過程を振り返ることができ、自己の変容に気付ける指導と評価の工夫」について少し触れさせていただきます。この視点は、授業が生徒にとってどのような意味があったのかを考える上で重要な視点であると思います。「授業が生徒にとってどのような意味があったのか」を考えることは、「学校に音楽の授業があること、学校で生徒が音楽を学ぶことには、どのような意味があるのか」を考えることにつながります。授業が「生徒にとって意味があること」が大切であることは、一見当たり前のことのように感じますが、教師にとって意味のある授業になってしまうことはないでしょうか。もちろん生徒にとっても教師にとっても意味があればよいのですが、教師にとっての意味は自覚している、生徒にとっての意味はとらえきれていないということは起こり得ることだと思います。以前、「音楽の先生は生徒に苦勞をさせて出来栄のよい演奏をさせることで自己満足しているのではないか」という批判的な意見を耳にしたことがあります。実際このようなことはないと思いますが、このように見えてしまっている現実もあったということを私たち音楽科の教師は肝に銘じておく必要があると考えております。そのような意味において、この視点から私たちは重要な示唆をいただけたと考えております。

それでは、昨日の公開授業、研究協議等で私が拝見させていただいた場面から感じたことについて触れさせていただきます。

亀田中学校の音楽集会についてです。集会の中で、各学年ごと合唱をする場面がありました。1年生の合唱の場面では、2・3年生がしっかりと顔を向けて聴いていましたが、その中にいっしょに1年生の歌う歌を口ずさんでいる女子生徒の姿がありました。自分がこの歌を歌った時のこと、また1年生だった頃の自分と重ね合わせて聴いていたのだと思います。また、2年生の合唱の場面では、1年生の中に2年生の歌を口ずさんでいる男子生徒がいました。何回か聴いたことがあり覚えたのでしょう。この1年生は、近い将来の自分を思い描き、あこがれをもって聴いているのだらうと思いました。どちらも主体的に音楽にかかわる一つの姿であったと思います。3年生の合唱の場面では、食い入るように見つめる1・2年生の姿と貫録すら感じる3年生の姿が強く印象に残りました。この姿は、音楽科のみならず亀田中学校の学校教育の総合力の成果であったと思います。全校生徒が一体となった姿に感動いたしました。

続いて授業についてです。

五島先生の歌唱「浜辺の歌」の授業です。グループ活動に入る際、先生は「話し合うだけではなくたくさん歌って試してみてください。」と子どもたちに言いました。これはとても大切なことです。だからこそ、私たちは授業をする際、生徒がたくさん歌って試したくなるような指導プランになっているのかという視点を常にもって見直す姿勢をもつことを大切にしたいと思いました。授業の中で、自分でつけたクレッシェンド、デクレッシェンド等の記号を忠実に再現して歌おうとしていたグループがありました。少し一生懸命やりすぎたので極端になりすぎて面白い演奏になってしまいました。そこで、子どもたちはニコニコ笑いながら、「なんでここにこれつけたの？」とつけた子どもに聞いていました。その子は、「波が押し寄せるような感じがしたからです。」と話していました。この流れは全然悪くありませんが、ここで生徒がわかったことは、自分の思い描いたイメージを記号で表して実際に歌ってみると、歌い方によってはちょっと変になってしまうこともあるということです。ここでは、イメージと記号の関係が変なのか、記号で表したものを音楽で表す表し方が変なのか、というようなことを考える必要が出てきます。波が押し寄せるような感じを表すために、クレッシェンド、デクレッシェンドをつけたことは間違いのないわけです。とすれば記号はただ記号であって、同じクレッシェンドでもいろんな歌い方があり、それを試しながら見つけていくことが学習過程において大切であることをその姿から学ばせていただきました。

次に佐藤先生の雅楽の鑑賞の授業です。この授業は、教材の選択と題材の構成に工夫がみられる興味深い授業でした。グループごと特徴と気づいたことについて話しながら付箋に書いて貼っていくという場面でした。このような実践はよく見かけるのですが、大切なことは、この言葉のやり取りをしている間、生徒の頭の中に音楽は流れているかということです。言い換えれば子どもたちの書いた言葉、自分が書いた言葉や友だちが書いた言葉から、音や音楽がイメージされているかということです。音楽に基づいた言葉の交流であったはずが、言葉に基づく言葉の交流になってしまう危険性のある実践も散見されます。そのような中、こういった課題について共に考え解決の糸口を見出す機会になったのではないかと思います。

近藤先生のアイダの鑑賞の授業です。導入の場面だけ見せていただきましたので、ここでは、本時の課題の設定場面について触れさせていただきます。近藤先生は今日の目標を示す際、まず目標の文章後半部分である「オペラのよさや美しさへの理解を深めよう」を示します。その後「その手がかりとしては何があるかな」と投げかけて、「登場人物の表現等を手がかりに」と付け加えました。このことによって子どもたちは何をするために自分ではどうするのが明確になっていきます。本時の目標は、出し方によって生徒の受け止めは変わります。また、用意しておくのか、その場で書くのかによっても生徒の受け止めは変わります。本時の目標やめあて等の設定の仕方、示し方についてこれをきっかけにさらに皆さんと深めていければと思います。

続いて小川先生の箏を使った創作、器楽の題材です。2人組で、交代で自分の作品を弾いて試していく場面でした。私の見た女子生徒は、一つ一つの音、フレーズ、奏法を丁寧に確かめ、あるいは試し、じっくり音を聴きながら活動していました。自分の作品であるからこそ、それは単なる音の羅列ではなく、音やフレーズから生まれる自己のイメージを伴っています。だからこそこだわりをもって音を出し、その音に耳を傾けることができていたのではないかと思います。こういった学習は、他の作曲者が創った他の作品などを演奏する際に生きていく大切な器楽の学習になっていたのではないかと思います。

西山先生の「江差追分」の歌唱の授業です。グループで歌い方を追求していく場面でした。先生がグループの子どもたちといっしょに歌いながら、追求のポイントを示し、その後、生徒たちは、基本譜の線を指でたどりながら実際に歌い試しました。基本譜の線とCDの範唱の声と実際歌う自分たちの声、この3つが生徒の中できちんと一体化している様子がうかがえました。生徒は聴覚、視覚、触覚等をフル活用していました。これは音楽を体全体でとらえている姿だったと思います。CDに合わせて3回ほど歌った後、CDなしで歌いましたが大変見事に歌っていました。感覚、知的理解、体の使い方等、そのどれが欠けても十分な学習にはならないということを教えていただいたステキな場面だったと思いました。

研究演奏I、中学生によるオペラ「アイダ」では、中学生の音楽表現の可能性の大きさを感じるとともに、力いっぱい表現している生徒の姿に強く心を動かされました。市民オペラ、学生オペラが盛んな函館地域ならではのお取組であったと思います。また、高等学校部会のワークショップでは、「西洋の音楽受容の先駆けの地、函館元町を音楽と共に巡る」というテーマでした。記念演奏1もワークショップも、開催地がこの函館・道南地区であることによって実現し、意味をもったものであったと思っております。

私たちの研究や研修は、授業がなければ、またそこに子どもの姿がなければ成立しません。公開授業にあたり、様々にご理解ご協力いただきました関係校の校長先生はじめ教職員の皆さま、保護者の皆さま、そして何よりも慣れない環境の中で日頃の学習の成果を発揮し、生き生きと音楽と関わる姿を見せてくれた児童生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。また、このような素晴らしい機会を設定していただきました大会実行委員長の金谷美也子先生をはじめとする実行委員の皆さま、授業者の先生方に心より敬意を表すものでございます。本大会のご成功にお祝いを申し上げますと共に、ご参会の皆さまの一層のご活躍をご祈念申し上げます、講評とさせていただきます。ありがとうございました。



平成28年度 全日本音楽教育研究会全国大会 函館・道南大会

◆ 中学校部会総会 ◆

日時：平成28年11月1日（火） 14：00～14：45

会場：函館市民会館 小ホール



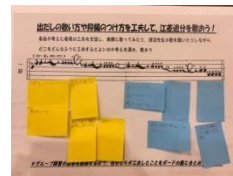
中学校部会総会は、四国地区部副会長、臼井隆先生の開会の言葉で始まりました。風見章部会長の挨拶、北海道支部長の梶田邦昭先生の歓迎の言葉に続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の臼井学先生よりご祝辞をいただきました。その後、荒川徳子事務局長より、6月に江東区文化センターで行われた全国理事会の報告、志村誠一郎調査部副部長より今年度の調査報告、退会役員の方々へ感謝状贈呈、最後に前年度大会（静岡大会）謝辞と次回大会（沖縄大会）の紹介が行われ、中学校部会総会は幕を閉じました。

◆公開授業レポート◆

日時：平成28年11月1日（火）

会場：・函館市立亀田中学校

研究主題 『喜びを実感できる 音楽表現や鑑賞の深まりをめざして』



【歌唱・鑑賞】第3学年

題材名 「雅楽の多様な表現に親しみ響きを味わおう」 一日出る国の新しい響きー

教材名：雅楽「越天楽」

指導者 七飯町立七飯中学校教諭 佐藤 圭佑

「紫御殿物語・鳥瞰絵巻」より第四曲

「南蛮渡来の秘曲とねじれる時間の秘法のことなど」(伊佐治 直 作曲)

本題材は、雅楽「越天楽」にとどまらず、現代雅楽作品の鑑賞まで学習を発展させる魅力的な実践であった。授業では「紫御殿物語・鳥瞰絵巻」より第四曲を鑑賞し、音楽的な特徴（音色・構成・形式）や気付いたことをワークシートにまとめ、グループおよび全体で交流するという流れで展開した。生徒からは活発に発言があり、先生と生徒とのやり取りの中で生徒の現代雅楽に対する理解が深まっていると感じた。雅楽のもつ音楽的・文化的価値に目を向け、雅楽が今もなお発展し続けている日本の重要な文化遺産であることに気付かされる貴重な授業であった。



【歌唱】第2学年

題材名 「日本の美しい情景を表す歌を、曲にふさわしい音楽表現の工夫をして歌おう」

教材名：浜辺の歌（林 古溪 作詞 成田 為三 作曲）

指導者 函館市立宇賀の浦中学校教諭 五島 明子

生徒は「浜辺の歌」の情景を思い浮かべ、熱心に課題に取り組んでいた。速度・強弱をワークシートの楽譜にふさわしい記号を考えさせ、個人の設定を見せ合い、グループでどうするのか、なぜそうするのかなど理由を述べさせ、曲にふさわしい表現の工夫を行った。本時の最後に先生が種明かしをしたが、成田為三の設定する速さが、生徒の思いよりもかなり速かったのが興味深かった。次時は実技発表とのこと。グループごとに設定した「速度・強弱」で自分たちの想いや意図を実現させていく場面である。ワークシートに書かれた記述を生徒たちはどのように歌唱表現するのか、楽しみであると感じた。



【創作・器楽】第3学年

題材名 「箏の音色と音階を生かして、まとまりのある音楽をつくって演奏しよう」

教材名：「生徒作品」

指導者 函館市立恵山中学校教諭 小川 貴子

箏で表現したい季節や風景を2～3人のグループで共有し、一人一人がつくった旋律をつなげて一つの作品にする。そして、箏の音色や奏法の特徴を生かして表現を工夫する、という創作・器楽の授業であった。生徒たちは、個人で演奏の工夫点を考え、グループ交流ではお互いの考えを積極的に発言する場面が見られ、その過程で生徒たちの中に演奏に対する思いや意図が確実に深まっているのが感じられた。中間発表会では、演奏を熱心に聴き、附箋に良かった点やアドバイス等を真剣に記入していた。この生徒同士で交換するアドバイスによって、演奏が、そして生徒たちがどのように変容するか見てみたいと思った。



【歌唱】第1学年

題材名 「江差追分の発声や節の特徴を生かして歌おう」

教材名：江差追分（北海道民謡）

指導者 江差町立江差中学校教諭 西山 裕恵

江差町では、小学校から「江差追分」を全員が学習する。地域に住む人、皆が当たり前のように「江差追分」に親しんでいる土壌がある。「江差追分」には、正調基本譜が存在し、基本の節や歌詞など、既に決められたスタイルが存在する。授業では4～5名のグループに分かれ、創意工夫を行った。「首を動かさずに声帯を動かして張りのある声を出したい」「出だしをくっきり、はっきりさせたい」「コブシの最初は小さく、あとから大きく、波が岩に小さく当たる感じ」など、色々な意見が出され、試行錯誤しながら唄っていた。ゲストティーチャーの存在も大きい。また、尺八伴奏をするスーパー中学生に驚いた。



地域の宝である「江差追分」のよさを再確認し、「自分たちがこれからも大切に受け継いでいく」という考えを土台に授業を行っており、素晴らしい実践であった。

【鑑賞】第3学年

題材名 「登場人物の音楽表現などを手がかりに、オペラのよさや美しさを味わって鑑賞しよう」

教材名：オペラ「アイダ」より第2幕第2場（ヴェルディ 作曲）

指導者 函館市立旭岡中学校教諭 近藤 基子

オペラ「アイダ」の第2幕第2場の一部を鑑賞し、登場人物の音楽表現などを手がかりに、グループごとに分かれて、何度も音源を聴きながらA～Dの登場人物を予想する活動であった。声の特徴や歌い方、伴奏のオーケストラの表情やストーリーを考え、根拠をもって鑑賞を深める場面が見られた。



自分の考えを大切にしながらグループでの交流などに取り組むことで、互いの考えを共有・共感していく過程に好感が持てた。また、オペラにおいて音楽がどのような役割を担っているのかを考えることによって理解を深め、オペラのよさや美しさを味わうことができた授業であった。

◆ 記念演奏 I ◆

日時：平成28年11月2日（木） 15:10～16:30 会場：函館市民会館 大ホール

函館・道南の中学生による オペラ「アイダ」（作曲：ヴェルディ） *全4幕より抜粋しての演奏

函館は、市民オペラや学生オペラが盛んな街である。平成12年度の第42回北海道音楽教育研究大会函館大会では、研究演奏として小・中・高校生による道南学生オペラ「カルメン」を上演した。これをきっかけに翌年から函館市中学校合同音楽会において、オペラ「アイダ」上演の取組を始めた。平成22年度には「アイダ」全4幕からの抜粋で50分の上演を果たした。6年後の今回、函館・道南から広くキャストを募集し、上演時間も大幅に拡大して75分で上演されたオペラ「アイダ」。中学生の可能性の大きさを感じるとともに、大きな感動に包まれた舞台であった。



◆ 記念演奏Ⅱ ◆

日時：平成28年11月2日（水） 11：00～12：05
「道南・函館の音楽」

会場：函館市民会館 大ホール
※『 』は演奏曲目



- 第1部 「西洋音楽発祥の地 函館」 ～ペリーの運んできた音楽～
第2部 「道南・函館ゆかりの音楽」 ～響け 道南・函館の音楽～

<プログラム>

◆ 讃美歌旧100番

◆ 聖歌「我が霊や」

◆ 「きらめきの街へ」

指揮：白須 朋子 山岸 久生 伴奏：水田 真木子
演奏：北海道函館中部高等学校音楽部
遺愛女子中学高等学校音楽部

◆ オラトリオ「サウル」より 葬送行進曲

指揮：高橋 聡
演奏：函館地区小学校合同吹奏楽団

◆ 江差沖揚音頭 北海道指定無形民俗文化財

演奏・演技：江差町立南が丘小学校5年生 船頭：菊池 勲

◆ 「いいもんだな故郷は」

指揮：高橋 聡 演奏：函館地区小学校合同吹奏楽団

◆ 「赤とんぼ」

指揮：明戸 泰子 伴奏：畑中 麻衣
演奏：函館市立北美原小学校合唱部
函館市立日吉が丘小学校合唱団

◆ カンタータ「函館幻想」より「ろうそく1本」「じゃがいもの唄」

指揮：高橋 聡
演奏：函館市立北美原小学校合唱部
函館市立日吉が丘小学校合唱団
函館地区小学校合同吹奏楽団

◆ 「千の風になって」

指揮：高橋 聡
演奏：函館地区小学校合同吹奏楽団
合唱：北海道函館中部高等学校音楽部
遺愛女子中学高等学校音楽部
函館市立北美原小学校合唱部
函館市立日吉が丘小学校合唱団



Information

全日音研中学校部会ホームページも是非ご覧ください。 <http://zennichionken-jhs.jp/>